

足^たるを知る

善光寺住職

黒田武志



昨年、私たちの国は戦後五十年を迎えました。まったくの廃墟^{はつきよ}と化した状態からコツコツと努力を積み重ね、とうとう世界でも有数の「豊かな国」を築き上げた日本…。しかし、五十年という節目にあたる年に起こった数々の事件は、近年まれにみるほどショックなことが多すぎました。阪神大震災―それによって生きる希望を失った老人の自殺、オウム真理教事件、住専問題、イジメによる子どももの自殺の多発、若い母親の幼児虐待^{ぎやくたい}…。毎日毎日の新聞には、暗

いニュースがこれでもかこれでもかとはかりに掲載され続けました。これが、「豊かな国」となったはずの日本の、戦後五十年目の姿だったのです。

たしかに日本は物質的には「豊かな国」になつたかもしれませんが。テレビ、冷蔵庫、洗濯機なんでもちろんのこと、ビデオ、オーディオ、電子レンジ、乾燥機などが一般家庭にもずらりと並び、自家用車を持ち、長い休日には海外旅行という家族もそれほど珍しくなくなりました。

国民の中流意識は、今や九十パーセントを越えています。飢餓で幼い子が次々と死んでいく国から見れば、贅沢この上なく、幸せな国に見えることでしょう。それなのになぜ、私たちの国には、こうも暗く悲惨なニュースばかり流れるようになってしまったのでしょうか。私には、今の日本がどうしても「本当に幸せで豊かな国」だとは思えないのです。

心をないがしろにしてきた日本

「今、あなたは幸せですか？」と問われて、胸を張って、「はいっ。とても幸せです」と答えられる人が、今の日本には何人くらいいるでしょうか。「豊かな国」に暮らしていながら、なぜか、自分が豊かだとは実感できずに、逆に悩み、苦しみ、不平不満の気持ちばかりで生きている人が少なくないのが現状です。戦後、ゼロからのスタートを余儀なくされてきた日本は、必要

な物質を手に入れること、次いで、欲しい物質を手に入れることなど、物質的な豊かさだけを目標にして進んできました。その結果、大切なものを犠牲に：さらには、ないがしろにしてきてしまったのです。

それは、「心の豊かさ」です。

激しい競争社会の中、温かい心を育てることを忘れ、自分がどうすれば得するか、楽するかばかりを考えながら人と付き合い、だんだんと人間関係をゆがませ、人を苦しめ、そして自分も苦しむ。自分だけが大切に、相手を思いやる心を教えられず育った子は、人の痛みや苦しみがわからずイジメに加担し、生命のぬくもりを欠いて育った若者は、その尊さに気づかず、自分勝手な信仰のために人の命を奪う…。借りたお金はきちんと返さなくてはいけない」という、幼稚園の子でもわかりそうな道理を平気で無視する社会が生んだ住専問題。なにかもが、心



をないがしろにしてきた結果だと思えてならないのです。

人生の悩みや苦しみは、誰にでもあります。しかし、それを乗り越え、心から幸せになり、豊かさを実感することが、誰にでもできます。今からでも遅くはありません。心を大切に、次にお話しする心の法則を知ってもらいたいのです。自分のために、そして、自分の子や孫の未来のために…。

足りることを知る

お釈迦さまの遺言ゆいごんともいうべき最後の教えを内容とする経典『遺教経ゆいきょうぎょう』の中に、「知足ちそく」という言葉があります。

「知足」とは、「足りることを知る―足りることを知る」ということです。「多くの悩みや苦しみから逃れるためには、足りることを知りなさい。足りることを知れば、人はみな心豊かに幸せにな

れます」と、お釈迦さまはおっしゃっています。

「足りるを知る」というのは、今与えられている自分自身に心から満足し、自分を生かしているすべての恵みに感謝しながら生きている人のこと。逆に、「足りるを知らない」というのは、毎日何か不足に思い、不平不満をいながら生きている人のことです。同じ人生を生きていくにしても、両者の幸福感には天と地ほどの違いがあります。「幸せ」というものには、客観的な基準などありません。自分が「幸せだなあ!」と感じたときが、本当に幸せなときなのです。

たとえば、足りることを知っている人は、どんなに貧しくても、野宿をするような生活であっても、自分を照らしてくれる太陽や、とりまいてくれる空気にさえ感謝ができ、ありがたいと思うことができます。

足りることを知らない人は、どんなにすばらし

い高級住宅に住み、外車を乗り回し、地位や名譽があつたとしても、まだ足りない、まだ足りない」といい続け、満ち足りることがありません。常に満たされない状態というのは、とても不幸で憐れです。さらに独占欲、所有欲、財欲など限らない自己の欲望に振り回され、自分で自分の生なままれながらの美しい心を汚していつてしまいます。足るを知らない人の人生は、かわいそうなものです。いつまでたっても、多くの悩みや苦しみから逃れられないのですから。

二十一世紀を見つめて

こんな話があります。事業に失敗し、世の中の何もかもに絶望し、死に場所を探し求めて歩いていたある人が、最後の宿代で木賃宿に泊まりました。暗い四畳半の部屋の中で、「明日こそ死ななければ」とため息をつき、ふと襦はすまを見るとき、破れを隠すために張りつけたであろう紙片

に、

「裸にて 生まれてきたのに 何不足か」

という小林一茶の句が書かれてあるのが目に止まりました。その人は何度も何度も心の中でその句を繰り返しているうちに、突然、心が百八十度轉換したのです。「そうだ！俺は正真正正しょうしんしょう銘丸めいがん裸で生まれてきたんだから、また裸一貫でがんばればいいんだ！」と。それからは情熱的に燃え続けて、ついに事業を再興し大成功をおさめたのです。あの木賃宿で心が変わらなかつたら、その人の一生はどんなに惨めなものだつたでしょう。金も名譽も何の持ち物も持たなくとも、この世に生を受けたということがまずすばらしいことだったのだ―そのことに気づき、「足るを知る」人になった瞬間から、運命は好転していったのです。

このように、心のもち方次第で、すべての人が、「足るを知る」人になり、幸せになることが

できるのです。今抱えている悩みをちよつと横に置いておいて、日本という国をイメージしてみてください。春夏秋冬、美しい四季に恵まれ、自然―太陽・雨・風・山・川・草・木…は私たちに分け隔てなく、**生命**を生かす食べ物を与え続けてくれています。私たちは生かされているのです。でも赤ん坊だった私たちは、自然の恵みを手に入れ口にする手段を知りません。自分
は口にしなくても子どもにだけは…と、食べ物を与えててくださったのは誰だったのか…。
あなたが精神的・肉体的に苦しむ姿を、できるものなら代わってやりたいと一心に思ってくたさる人が、必ずあなたにはいるはずでず。たとえ、目に見えない姿となっていたとしても。

もし少しでも、「ああ、ありがたいなあ」という気持が芽生えたなら、私は、あなたはもう、「足るを知る」人になっているのだと思います。「足るを知る」人となった後の生活は、それは

楽しいものです。おいしいお茶を飲むだけでしみじみと幸せを感じ、おいしいお菓子をいただけば心からありがたいと思え、瞬間、瞬間、毎日、自分が、自分にとって、最高・最良の時となるのです。暑ければ暑さを楽しみ、寒ければ寒さを楽しむことができるようになり、いつでもが好時節。世の中から辛いこと、不快なことが消えてくれるのです。

二十一世紀まで、あと四年。すばらしい世紀にするために、すべての人が、早く気づいてくれるといいなあと思います。恵まれている自分に。生まれながらに持っている、あなただけにしかないすばらしい宝に…。

こんなにも自分が幸せなのだから、人にも幸せを与えたいという気持を一人ひとりが持てば、きつと二十一世紀には世界中から暗いニュース・悲惨なニュースは消えていることでしょう。

『生きる力』神奈川・第二宗務所第五教区